

1. 「自然」の分類

「自然」はいくつかのサブカテゴリーに分類することができる。私は萩原なつ子にならい、生物の皮膚を境として、「自然」を「外なる自然」と「内なる自然」の2つのテリトリーに分けたい。そして「外なる自然」／「内なる自然」の二元論の観点からすると、性sex/gender/sexualityの問題は后者である。¹従来の日本の環境文学は、「外なる自然」を扱ったネイチャーライターにより多く注目し、いくつかのエコフェミニズム批評を除けば「性」、中でもセクシュアリティという「内なる自然」を扱ったネイチャーライターにはそれほど注目してこなかった。しかし、この問題を詩というツールを使って取り組んだ日本の詩人がいた。伊藤比呂美である。²

2. 伊藤比呂美の詩

2-1. 「外なる自然」と伊藤比呂美

特にセクシュアリティという「内なる自然」を主題とした詩が多いことで知られる伊藤だが、「外なる自然」を題材とした詩も多く創作していることはあまり知られていない。それは『草木の空』や『青梅』などの作品集のタイトルからも見て取れる。またコヨーテに関する記述も多い。伊藤のエッセイ「モンスーン・ガーデン」(2002)は、大量の植物名で埋め尽くされている。

同エッセイに登場するキク科のオオアレチノギクは伊藤の作品に一貫して登場する植物である(伊藤 2002, 187)。詩集『青梅』(1982)には「オオアレチノギクを抱きかかえる」の詩があり、また「荒地野菊」の詩のうち2ページ全面が「オオアレチノギク」の文字で埋め尽くされている(114-15)。詩集『河原荒草』にも「オオアレチノギクのように背が高い」河原の男が登場する(伊藤 2005, 86)。このように伊藤比呂美はその詩で「外なる自然」を詠う日本のネイチャーライター・エコポエトである。³

2-2. 「内なる自然」・セクシュアリティと伊藤比呂美

その「オオアレチノギクのように背が高い」河原の男が登場するのは「河原で」という詩である。

河原の男は夕方に出てくる、夕方と同じ時間に河原にいる、夕方に出てきて、あずまやの中にすわっている、他に人はいない、男は年取ってこぎたなくてみすぼらしい、死骸のようにおおじろい、オオアレチノギクのように背が高い、夕方そこに来て同じことをする、ペニスを出してそれをさわる、さわりながら、小刻みに揺れる、ペニスが立ち上がる、どこかで嗅いだことのあるような、においがする、手の中のペニスがぴかぴかひかかって白いものがそらを飛んで、においが消える、河原の男は、同じ時間帯に同じあずまやでペニスをにぎり、同じやりかたで小刻みに揺れる、においがする、においが消える、夕方になると、私たちはそれを見に行く、遠くから、みつからないように見て、帰る(伊藤 2005, 86)

この箇所には、「おんな」としての経験に基づいたガインセントリック gynocentric なエクリチュール・フェミニンとしての伊藤の作品が、「外なる自然」のみならず、セクシュアリティをめぐる「内なる自然」も同時に扱っていることが如実に表れている。この意味で、伊藤はエコフェミニストである、と言える。なぜならエコフェミニズムは、「自然の問題」と「性の問題」とを同時に考える思想だからである。また伊藤はフェミニズムの影響も受けている(伊藤・田中 10)。

3. 韓国のエコポエト・崔勝鎬との比較

上述の通り、伊藤比呂美は「外なる自然」とセクシュアリティを中心とした「内なる自然」の両方を扱う日本のネイチャーライター・エコポエトでエコフェミニストである。では韓国で伊藤比呂美に相当するのは誰であろうか。1つの答えがエコポエト・崔勝鎬である(森田 2006)。

Kim Won-Chungが編んだ*Cracking the Shell: Three Korean Ecopoets Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong*に収められている崔勝鎬のアンソロジー“From the Secular City to the Land Beyond Desire”のうち“The Pleasures of the Secular City 1(世俗都市の快樂 1)”の詩は、崔勝鎬が「性をめぐる内なる自然」を主題化した詩

¹ ここでは sex は生物学的な性、gender は社会的文化的な性、sexuality は性的欲望と仮に定義する。

² 日本のネイチャーライター・宮沢賢治も「外なる自然」とセクシュアリティという「内なる自然」の両方を扱った。彼は「草や木や自然を書くようにエロのことを書きたい」と考えていた(押野 77)。

³ 文学・環境学会が編集した、ネイチャーライターを紹介する『たのしく読めるネイチャーライティング』(2000)に伊藤比呂美の名はまだない。改訂版が出版される場合は、伊藤の紹介が掲載されることが望まれる。

の1つである。⁴同詩で崔勝鎬は、「少女」「セックスシーン」「女優」「裸体」「僕」「幻想」「舌」「肉欲」といった記号を駆使し、セクシュアリティをめぐる「内なる自然」を主題化している。

4. クイアなエコポエト？ 再び伊藤比呂美

伊藤比呂美が超えることができ、崔勝鎬が超えることができなかったのがセクシュアリティにおける異性愛というコード、異性愛主義 heterosexism であった。

上野千鶴子は伊藤の初期の作品に「シスターフッド」「女たちへの愛」を見る(上野 144)。その後、この2人は共著『のろとさにわ』(1991)を著し、その中の1セクションに「レズビアニズム」を設ける。⁵同セクションで伊藤は実験的に異性愛のコードを超える。詩では、「一年間詩をやりとりして数回会って／数回キスして数回セックスしてみただけの仲」という「彼女」に対して、伊藤はコートを買す。

彼女の骨格はわたしのよりかなり小さく／コートは彼女をすっぽりつつみこんだ／コートは彼女をすっぽりつつみこんだ／コートはわたしをもすっぽりつつみこむ／着る女という女を／男につつまこまれたいヘテロセクシュアルにしたてあげてしまう戦略的なコートだ／彼女に貸す前、わたしはそれを着て車の中で男を性交した／...その戦略的なコートにくるまって何回も何回も何回も／オーガズムを感じた／そのコートが彼女をもつつみこんだ(145-46)

詩の中の「彼女」は上野のことを指していると考えられる。この詩にエッセイで応答した上野は、伊藤との「キス」「セックス」の「事実」を否定した上で、この「ヘテロセクシュアルにしたてあげてしまう戦略的なコート」というコードを「ただの習慣(歴史がつけたクセ)」「異性愛のシナリオ」とフーコー的・社会構築主義的に解釈する(伊藤・上野 156)。「だけど、やっぱり男っておもしろいから、やめられないんですよね。一生こうなんだろうな。」(伊藤・田中 53)と語る伊藤は「レズビアン」ではないと考えられるが、性を明け透けに語り、「シスターフッド」「女たちへの愛」を支持し、「レズビアニズム」を実験する**伊藤はクイアなエコフェミニストである**。

近年はエコフェミニズム・エコフェミニズム批評の分野でもクイアの視点を取り入れた論稿が登場、その初期の代表的なものに Gaard の“Toward a Queer Ecofeminism”がある。クイア・エコフェミニズムは従来のエコフェミニズムにはセクシュアリティの変数が欠けていたという認識に立ち、西欧文化の同性愛恐怖 homophobia や性愛恐怖症 erotophobia を問題化し、女性の解放には自然・性・クイアの解放を必要と考える思想である。「フェミニズムの影響をうけて、80年代女性詩のさきがけを作」(伊藤・田中 10)った伊藤は、その詩で女性のみならず自然・性・クイアを扱い、まさにクイアなエコフェミニストである。また伊藤のクイア性 queerness は彼女の詩「父の子宮あるいは一枚の地図」(伊藤・上野 118-123)にも窺える。

5. 纏めと小さな結論

本稿は第1に、伊藤比呂美をネイチャーライター・エコポエトとして再定位した。第2に、伊藤比呂美をエコフェミニストとして位置付けた。第3に、伊藤比呂美と韓国のエコポエト・崔勝鎬の類似性を考察した。第4に、伊藤比呂美をクイアな詩人として位置付けた。

クイア・エコフェミニストでエコポエトである伊藤比呂美の試みは続く。

参考文献

- 文学・環境学会編『たのしく読めるネイチャーライティング』ミネルヴァ書房, 2000.
フーコー, ミシェル『性の歴史 I 知への意志』渡辺守章訳, 新潮社, 1986.
Gaard, Greta. “Toward a queer ecofeminism.” *Hypatia*, 12(1) (Winter 1997): 114-37.
萩原なつ子「フェミニズムからみた環境問題—リプロダクティブ・ヘルスの視点から」桜井厚・好井裕明編『差別と環境問題の社会学 シリーズ環境社会学 6』新曜社, 2003. 117-38.
伊藤比呂美『青梅』新潮社, 1982.
伊藤比呂美「モンスーン・ガーデン」今福龍太編『「私」の研究』岩波書店, 2002. 181-203.
伊藤比呂美『河原荒草』思潮社, 2005.
伊藤比呂美・田中克彦「対談 女&男」『八事』(中京大学評論誌)第20号(2004):8-53.
伊藤比呂美・上野千鶴子『のろとさにわ』平凡社, 1991.

⁴ 他には“Industrial Complex (コンビナート)”の詩などが該当する。

⁵ 同書は「言葉」「インターコース」「穴」「男」「オナニー」「排泄」「娘」「中年」「マゾヒズム」「欲望」「レズビアニズム」「亡命」の12のセクションに別れ、各セクションに伊藤の詩と上野のエッセイが1篇ずつ掲載されている。

Kim, Won-Chung, ed. and trans. *Cracking the Shell: Three Korean Eco-poets Seungho Choi, Chiha Kim, Hyonjong Chong*. Paramus: Homa & Sekey, 2006.

森田系太郎『韓国環境詩人・崔勝鎬の成果性、不可能性、そして可能性』第12回 ASLE-J/文学・環境学会全国大会, 於・東北大学, 2006年9月。(口頭発表)

押野武志『童貞としての宮沢賢治』ちくま新書, 2003.

上野千鶴子「もと拒食症の少女の悪魔 祓い」『伊藤比呂美詩集』思潮社, 1988. 138-46.